



第 18 号

(年 2 回発行)

発行所

喜多流大島能楽堂

〒720-0814

広島県福山市光南町2-2-2

TEL 084-923-2633

- P2 先人の心を継ぐ
- P4 謡曲『鶯』から得た私の心
- P6 「弱法師」への旅
- P8 喜寿の手習い
- P10 政允先生の「烏頭」

- 友枝昭世
- 宮崎泰一
- 植岡康子
- 大島淳司
- 草野冴子

『卒都婆小町』初演によせて

喜多流職分 大島 政 允

福山の舞台で父久見が昭和三十三年より始めた定期公演(能楽教室)が今年で五十年目を迎えます。その節目に、この秋十一月三十日、大曲『卒都婆小町』を披かせて頂く事となりました。この曲については強い思い出があります。もう五十年も前の事となります。

喜多宗家に内弟子入門して二年ほどの頃、喜多会別会で後藤得三先生の『卒都婆小町』が上演されました。私はまだ舞台には出してもらえず、楽屋口から拝見しました。この日は楽屋の雰囲気も普段と違い、何だかピリピリとした感じでした。そして、もうご高齢でした十四世六平太先生も後見としてお出になりました。お舞台は誠に充実した自由闊達な素晴らしいものでした。お能がこんなにも面白い物だと改めて思ったものでした。その時は将来、自分が出来る曲とは考えてもいませんでしたが、この度、諸先輩のご助力を得まして、念願の舞台を勤める事となりました。



小野小町の老いて後までも衰えぬ強い生命力、また哀れみの悔悟の情、一代の才女の人生を演じきればと思っております。

ご共演頂く三役の方々、流儀の名手の方々に支えられ、何とか充実した舞台にしたいものだと思っております。ご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

先人の心を継ぐ

喜多流シテ方職分

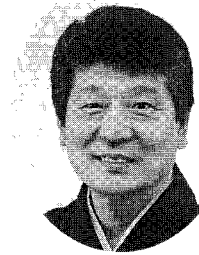
友枝 昭世

私の家、友枝家は平安中期頃より熊本の北岡神社に仕える舞楽座の首班の家でしたが、加藤清正の時代に能役者の家となり、その後細川家お抱えとなりました。祖父の為城まで熊本にいました。父の喜久夫の代から東京に移り住んでいます。熊本の友枝家には能舞台があり、面装束もあつたのですが、面箱の他は何もかも空襲で焼けてしまいました。父は東京でも空襲に遭い、随分と苦労をしたようですが、昭和二十五年には神宮前に稽古舞台を建てました。当時のお弟子さんや支援者の皆様のご後援あればこそでしょうが、九州男児の『肥後もつこす』の頑張りを發揮したのでしょうか。能役者にとつて三間四方の板の間は命そのものです。稽古舞台が出来て今年でもう五十八年になりますが、今日私があるのは、この稽古舞台のおかげで今更ながら父に感謝しています。喜多流は、大和猿楽の系譜に連なる観世・宝生・金春・金剛の四座に加えて、江戸時代に二代將軍徳川秀忠の後援により武士の式楽として新しく流派の創始を許された流儀です。明治維新後、幕府や藩のお抱えであつた能楽師たちは禄を失い、能楽は一時衰微しますが、喜多流においては十四世喜多六平太師、十五世喜多実師によつて流儀の立て直しが図られ、今日の基礎が築かれました。

私は終戦の一年後、六才から喜多実先生に師事し、父から稽古は殆ど受けていません。実先生の稽古は大変厳しく、徹底して基礎を叩き込まれました。『基礎がしっかりしていれば、その積み



能「野宮」シテ友枝昭世 於 アステールプラザ能舞台(2007.11.17) 池上嘉治撮影



とも えだ あき よ
友枝 昭世 氏

能楽師 喜多流シテ方職分

1940年 東京生まれ

国学院大学卒業

6才で喜多流15世宗家喜多実師に師事

7才で初舞台

友枝昭世の会・友枝会主宰

2003年 日本芸術院賞受賞

2008年 人間国宝認定



喜多実先生 誕生日パーティーで (1960. 2. 15)



重ねと経験を通して、熟成した舞台が出来上る、その上に個性は後から付いてくる』というお考えでした。実先生の暮らしぶりは質素で、お素人にお稽古をつけたほうが経済的には良かったでしょうが、家元の重責を担われている実先生は無償の玄人弟子の稽古に多くの時間を費やされました。私は通いでお稽古を受けていましたが、東京の練馬のご自宅には多い時で七、八人の玄人弟子を住ませ、朝、昼、晩と食事付きでした。

その中の一人に大島政允氏がいました。彼が上京してきたのは、中学を終えて高校に入る時と思います。内弟子時代の政允氏はおつとりとして失礼ながら、やや無精者でしたが、今の彼からは想像も出来ない眉目秀麗のイケメンでした。彼とは良く遊び(麻雀・ボウリング・酒)もしましたが、しかし、一番の思い出は、私が『道成寺』を披いた時の稽古です。乱拍子を含め、随分とあしらってもらいました。今の若い人たちが乱拍子の稽古をするには先輩たちの公演の折のテープを使っていますが、その頃はその術も無く、政允氏が秒針を見ながら、「ハ、ポ、チ、ヤ、ハ、ポ」とやってくれました。百回近くは、あしらって貰ったと思います。今でもすごく感謝しています。

『道成寺』といえば、政允氏の披きは今の福山の舞台披きの時(昭和四十六年九月二十四日)でしたが、前日までの突貫工事と暑かった事を思い出します。彼の披きに対しては何分の一かは恩返しできたかなと思っています。

若い時、宗家や父のお供で福山の舞台に参りました時の一番の思い出は催しの翌日の釣りです。私は釣りにには全く興味は無かったのですが、海に出た時の爽快感、舟で食べる魚や魚飯の美味しかったこと、又今は亡き和島富太郎先生のジョークを交えての話し等、本当に楽しいひと時でした。

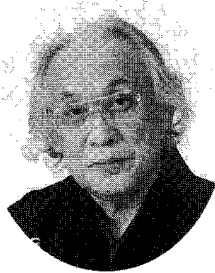
能楽教室(現・大島能楽堂定期公演)は先代久見先生がご自分の芸の向上と一般に能を知らしめる為に昭和三十三年より始められました。父は久見先生とは十四世六平太先生の相弟子として親しくさせて頂き、能楽教室の舞台を何度も勤めさせて頂きました。お弟子さんや関係者の方々の並々ならぬご支援のおかげですが、福山という地方で定期公演をこのように長い間、続けてこられたことは並大抵なことではなく、そのご努力に心から敬服いたします。三年前の二〇〇回記念公演に私が『清経』を勤めさせて頂いた事を感慨深く思っています。

思うに、多くのご苦勞を越えて続けてこられた久見先生の思い、生き姿が今日の政允氏には言うまでも無く、衣恵さん、輝久君に有形無形に伝わってきたのだと思います。十一月には政允氏は『卒都婆小町』を披かれる予定で、私も参加させて頂きます。泉下の久見先生もきつと喜ばれ、またあの世から応援して下さいましょう。佳い舞台を期待しています。

謡曲「鶯」から得た私の心

福山喜多会副会長

宮崎 泰 一



昭和五十年頃、それまで長い間広島で医療の道に専念して居りましたが、父が病魔に侵されてしまったので、大学病院での十八年間に及んだ生活を振り切つて郷里福山で父の医業を継承すべく霞町で開院しました。暫くして自分の時間を持てるようになり、仕事の外には無芸大食のみの自分に気がきました。趣味として何が出来るかと考えた所、唯一、職員を叱る時も声だけは大声、そう、この大声を逆手に取つて謡曲を習いたいと思いつきました。

丁度その頃喜多流能楽堂の看板を見かけ、すでに謡曲の道でも大先輩として活躍されていた若き日の高亀先生に紹介して頂き、大島先生と私の関係が始まりました。私は仕事の合間に練習するだけで、決して真面目な生徒ではありませんでした。久見先生は謡曲を素人に教える事は、あくまでも習う人の遊びの相手をする事ですよと断言されました。だから気楽にやつて下さいとの事でした。逆に考えれば、習う人の努力しだいですよと云われている厳しさを感じました。

久見先生は稽古の時も常に真剣に物語の主人公になりきつて、指導して下さつていた想い出は、私の脳裡から消える事はありません。特に親子の別れ、義経の生涯伝記物の時には涙を浮かべて謡われておられたご様子は先生の人情味の細やかさの表れだと感心しました。

さて、時は移り政允先生の代と若返り、さらにお子様達もそれぞれの道に精進されて、大島家におかれましては今が一番開花し、隆盛を極めておられる時だと推察しております。

久見先生亡き後は政允先生よりお稽古を受けています。私も七十歳を過ぎ、最近では老女物を習う機会が多くなり自分自身老境を感じる此の頃です。

今年の喜多流初謡会では「鶯」の一節を政允先生より

謡う様に言われ挑戦する事にいたしました。しかしサギという鳥については、我が家の泉水の鯉を捕られた事、草戸稲荷神社の森はサギ山と呼ばれ、サギの糞公害で悩まされている事等ぐらいいました。ましてやゴイサギに到つては名前の漢字も知らず、その鳴き声の悪さもあり、サギの仲間の中でも下品な鳥だと思っていました。しかし一方では姫路城は別名白鷺城と呼ばれ世界遺産に指定される程で、鶯を品位の高いものとして取り扱っております。また芦田川で見かけるサギの姿は何時見ても美しく、何時間でも一点を見つめ、小魚を追い求める根気強さには感心させられておりました。

政允先生のお話では「鶯」は原則として中年の者は舞わず、老人または子どものみが取り組むものとされているとの事でした。その意図する点は本曲が清浄清純を旨としていた為だそうです。

私事本年七十一歳を迎えて居りますが、決して清浄無垢な性格は持ち合せて居りません。しかし「鶯」に挑戦する程なら詳しく曲の内容、教訓について知つて置きたくて、インターネットを開いて見ました。

概略を書き下しておきますと、醍醐天皇の御代は世の中が安泰で国民の天皇への忠誠心も強かった頃の出来事で、京都平安京の南東隣に位置して八町の広さを有する神泉苑があり、天皇が行幸されて四季の宴が催され、ある夏の夕涼みの園遊会で水辺に一羽の鶯が羽を休めているのをご覧になられて大層御気に召されました。帝は召使の蔵人に鶯を捕らえて参れと仰せられ、蔵人が近づくと相手も羽持つ鳥故に飛び立とうとし捕らえる事が出来ず、蔵人は困つた果てに帝の御意なるぞと懇願したところ一度飛び上がった鶯が地に降りて蔵人に抱かれました。

この様子を帝は御気に召されて、すばらしい光景だとお褒めになつて蔵人と鶯に五位という官位を賜つて、鶯

は喜んで天高く舞い上がった。それ以来神泉苑のサギを五位鷲と呼ぶようになったという物語です。

この一見平凡な物語が美化された様に受け止めていました。通り一遍に「鷲」を習った時点で不思議だと思ったことは鷲の執った行動は帝より五位という非常に高い官位を賜る程の功績であったのかという疑問でした。ついで、この歴史的事実に基いた謡曲を謡い、舞うのに年齢制限があるのは何故かという疑問でした。

私の愚問に答えを出すべく謡曲「鷲」を何回となく練習し、平家物語第五巻の「朝敵ぞろへの事」を読んだり、神泉苑に関する文献をあさり、京都から神泉苑の写真、資料を取り寄せて、熟読してみると次第に鷲の気持ち、藏人の心の動き、帝の立場を冷静に考え得る様になりました。又、久見先生が舞われた当時の背景、立ち舞われたご様子、先生から聞かされたお話等を思い起こしていると、夢にまで鷲の姿が出て来るようになりました。ついに自分流に頭の中に鷲の全景を描ける様になり、僅かですが疑問に答えを出せるようになったと自信が湧きました。

「そうだ」この物語で一番偉いのは鷲であつて、人間ではないと言う事に気付きました。この場面で飛び上がった逃げたのでは帝にも藏人にも其々の立場を傷つけ、帝の命に従わない事は、天下泰平の世の体制が崩れかねないと危惧した物と思えます。鷲が人間界に捕らわれることで帝の地位は向上して、安穩な世の中が築かれるのだと悟り、鷲は無欲で善悪を理解し、解脱して現世の苦悩から開放されて、絶対自由の境地に達し得た心を持った立派な五位鷲で、本当は誰よりも一番この世の真つ当な生き方をわかまえて、行動に移したものだと思えました。

他方では帝は鷲を単純に捕らえて来いと命令された自分の心の未熟さにお気付きになられて、心労を与えた藏人と本当に立派な行動をとった鷲に中納言に次ぐ正五位という高い官位を授ける事で、心温まる五位鷲の解脱の精神に報いたいと、お考えになられたと理解しました。

この物語を我々人間界の日常の生活に置き換えて考えて見ますと、人生七十歳も過ぎ世の中の争いごとの無益さ、平凡に生きることの大切さを会得して純粹無垢に近い心境に達しないと、行い得ない勇氣ある行動だと思

いました。だとすれば、謡曲「鷲」は上演されるのに年齢制限を設けられた理由も納得できました。

平凡に考えていたこの謡曲「鷲」が私達に教える教訓は、実は底知れない人間の生涯の生き方の羅針盤だと思えば、非常に格調の高い物語であると改めて自分の無知、無能を恥じております。

この上は自分の行き方に五位鷲の心を反映すべく努力したいと思えます。二十五年間一人で我武者羅に頑張つて守つて来た地域医療ですが、六年前より娘夫婦が診療に加わってくれましたので、高度医療にも挑戦しております。医療面のみならず、日々の生活面においても少しずつですが全体を見る目も出来ましたので若い人達の相談にも心穏やかに乗れる様な七十代になりたいと思っております。頭と心を柔軟にして少しでも若さを保ちながら、亀の甲より年の功を発揮し、五位鷲の心を受け継いで、私の心の糧にしたいと切望しています。



能「鷲」シテ大島久見 於 大島能楽堂 (1988. 6. 19)

「弱法師」への旅

植岡 康子

新年早々の一月六日、はるか遠くにあつた「弱法師」の世界へと一歩を踏み出した。瀬戸大橋を渡つて、喜多流大島能楽堂をお訪ねし、当主大島政允氏と奥様にお目にかかる。「弱法師」についてお話を伺うためであつた。

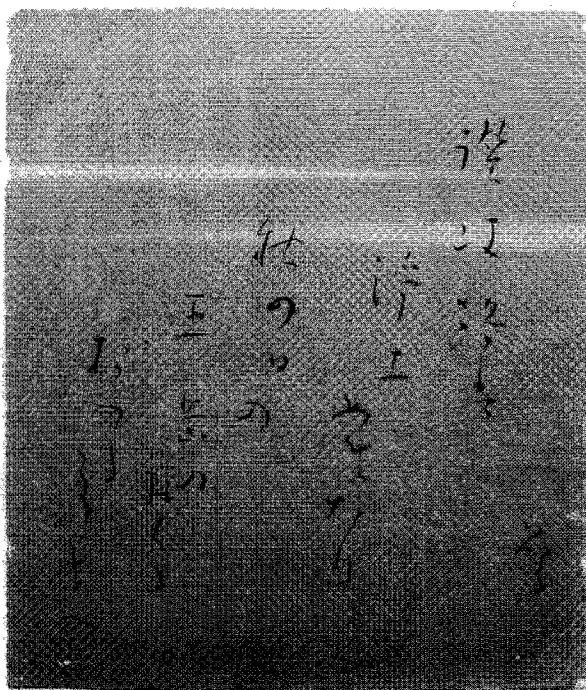
なぜ「弱法師」なのかというと、宗教学者山折哲雄先生から教示を受けたからであつた。教示を受けるきっかけは、二年前、七十五年ぶりに発見された与謝野晶子自筆の色紙にある。色紙に書かれた歌は

讃岐路は浄土めきたり秋の日の五岳のおくにおつることさへ

歌のなかにある「浄土とは？」とお尋ねしたところ、「弱法師だな。」と明言された。常世信仰から浄土信仰へ続く先にあるのが、「弱法師」であり、天王寺、難波の海より眺めた讃岐は浄土に当たる。空海も高野山より繰り返し眺めたはずだと。その日から「弱法師」への旅は始まつたのである。

さて、私どもの出版した『讃岐路は浄土めきたり』の本を携えての訪問となつた。素人の私どもがお尋ねする。当主が答えてくださる。

「弱法師は見る方に想像していただく。演じる側は純粹無垢、清浄に心を砕く。」とのこと。日想観のことも伺つた後、目黒能楽堂で当主



与謝野晶子 自筆 色紙

「讃岐路は浄土めきたり秋の日の五岳のおくにおつることさへ 晶子」



能「弱法師」シテ大島久見 於 東京喜多能楽堂 森田拾史郎撮影

が演じられた「弱法師」のビデオを見せていただきながら、説明を受ける。「クライマックスではシテは高ぶって、謡の調子も高ぶる。満目青山まんめくせんざんがキーワード。留拍子を普通はシテがするが、これではワキがする。」と。そして「弱法師」の面を見せていただけることには、「目は横に広いので、小面に比べてよく見える。」とおっしゃる。実際に二つの面を手に取り、目に着けさせていただいた。おっしゃるとおりであった……。

二月二十一日に時間を割いていただいて、京都で山折先生にお目にかかり、この面の話をする。「面」の逆説ということをおっしゃった。「源氏供養」のなかに「盲目はよく見えるように、若い女は若い女らしくなく演ずる」とあるそうだ。また、「弱法師」関連の資料として、折口信夫「身毒丸」柳田國男「モノモラヒの話」寺山修司「身毒丸」も教えていただいた。次々と「弱法師」の世界は広がっていく。

更に一カ月後の三月二十日、あいにくの曇り空ではあったが、大阪天王寺で行われた日想観に参加した。今は建物が建って見通すことはできないが、西門の先に、俊徳丸が「見ゆるぞ、見ゆるぞ」と声高らかに謡いあげた海の落日、その先の浄土を想像する。肌寒い風の吹く彼岸会であった。

とにかく「弱法師」の上演をこの目で見ないことには始まらない。待ち待った四月十二日、京都大江能楽堂で実現した。建って百年以上になる木造の建物。その能舞台に若い俊徳丸が現れ、美しく舞い謡う。能というのは美しい総合芸術なのだ、改めて思う。

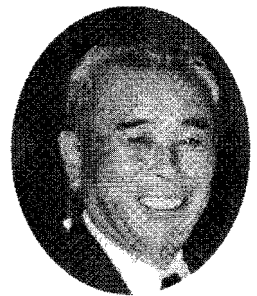
翌十三日、東京国立博物館に抜け、下村観山の「弱法師」を眼前に見る。昨日の能とはうってかわった、やせて老成した感じの俊徳丸が画面の右に立って、見えぬ目で画面左の落日を観じている。中央には古木の梅が枝を伸ばす。今からすると七十七年前の十月三十一日、与謝野晶子が香川県善通寺の地で眺めた落日も、このようなみごとさであっただろうか。堺出身の晶子だから、天王寺の日想観にきつと行っただろう。その日の落日の向こうに讃岐路はあるのだと感じいったのだろうか。私はしばらく身動きもならぬ思いであった。

植岡康子氏

二〇〇一～二〇〇七年まで香川県立善通寺第一高等学校に勤務し、二〇〇六年に与謝野晶子の自筆資料と出会う。
現在、香川県立坂出高等学校に勤務。

喜寿の手習い

大島 淳司



関西日本文化協会 会長
九州電力株式会社 顧問
株式会社正興電機製作所 特別顧問

父の形見の品は「鼓」である。昭和二〇年に福岡で他界したので、もう六三年前である。私は当時十四歳で今年、七七歳の喜寿を迎えた。

父圭一郎(故・寿太郎先生の弟)は大島七太郎の次男として明治十五年(一八八二年)に生まれている。当然幼少より喜多流能楽師の次男として能楽を学んでいた。

しかし次男であり、旧制・誠之館中学を卒業後は独立する為に官費の東京電信・郵便学校に進学した。その時、幸いに喜多流にご縁のある者としてお家元・十四世喜多六平太師のもとに寄宿させて戴き、能楽の世界でも修業する機会に恵まれている。

大島家に残っている記録では、圭一郎は父親の七太郎、長兄の寿太郎、弟の源三郎と共に福山の太島能楽堂はじめ各地での能公演には出来る限り参加していたようである。

通信省電話技師となり、勤務地は主として九州の各県庁所在地であったが、鹿児島在勤の大正六年(一九一七年)には鹿児島市中座で喜多流の能楽公演を企画し、兄弟で共に演じている。その後は舞台上演した記録は残念ながら残っていない。

熊本在勤時代の昭和五年(一九三〇年)には、喜多六平太師のご令室・文字様(女流閉基士)を自宅にお迎えしたときの記念写真が残っている。

戦後、福山の太島家は戦災で全てを失われた。戦後間もない頃、故久見先生は福岡で出稽古の機会に私宅に立ち寄られ、父圭一郎の遺品で稽古に使えるものをとのご所望もあり、母がお役に立つ物はどうぞと差し上げたと聞いている。

ただ、鼓だけは父も大切にしていたので、遺品として自宅に残してくれたのである。私の幼少時代、父が喜多流謡曲の先生として自宅でお弟子さん達にお稽古をしている謡声だけは記憶に残っているが、戦争時代になり父は四男の私には謡の手解きを受けさせる機会も無いまま他界した。

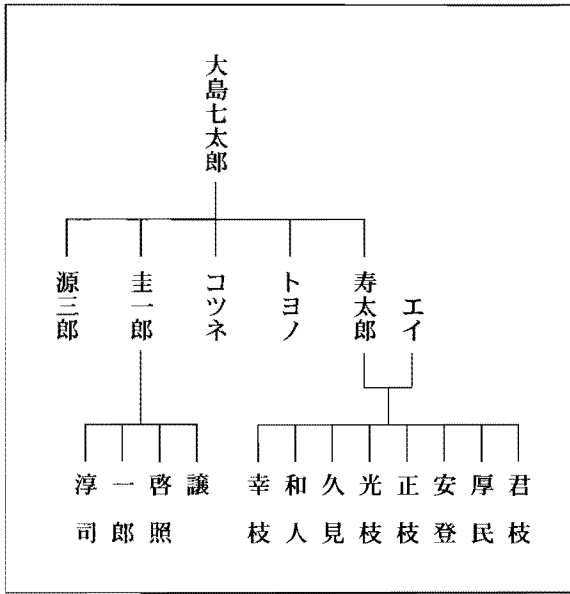
私も長ずると共に、久見先生のご活躍されている福山能楽堂の舞台を鑑賞する機会にも恵まれたのに、謡曲のお稽古にはこれまで無縁の世界で過ごしていた。

青年時代から、私は男声合唱団の世界で練習を続けて来たが、なかな

かご縁が無かった謡曲にも六〇代後半になり、近くの吉村秀臣先生に手解きを受ける機会に恵まれた。しかし、数年後に先生のご他界でこれも中断していた。

私も七〇台半ばを過ぎて浄土で若し父に再会することがあれば、『遺品の鼓で多少なりとも稽古をして来ました。』と話もしたいなと思う様になり、一念発起した。

昨春秋から仕事の合間を選んで一ノ会に入門し、幸流・飯田清一先生について鼓の稽古を始めた。先生から喜寿の記念としてこの秋の発表会に参加するよう厳命を受けている。今年には金婚式も迎えるし、喜寿の記念にと湯谷(熊野)のお稽古に励んでいる。飯田先生からは「喜寿の人が初舞台は珍しいし、ご婦人が多い発表会で男性は希少価値もありますよ。」とお励ましも受けている。



ご縁とは不思議なもので、鼓のお稽古場をお借りしている観世流・坂口先生のご家族は福山の大家家ご家族とは以前から親しくお付き合いがあるとお聞きした。

今年の四月末には、輝久氏が大牟田で公演の機会に時間を作って戴き、「湯谷」の補習をお願いした。その時、謡曲の数学的解釈もお聞きし、日本古来のリズム(七・五調)と奥の深い関わりがある事だけは伺い知る事が出来た。

父の遺品は父が残そうとした遺言を今、語り始めていると感謝している。



14世喜多六平太師ご令室・喜多文子様をお迎えて父・圭一郎と兄3人(昭和5年)

政允先生の「烏頭」

東京大島会

草野 冴子

大島能楽堂定期公演は今年五〇周年を迎えます。思いがけず久見先生御在世時に御縁を得て大島会の末席に加えて頂くことが出来ました。五年前病氣をしてから旅行が難しくなり、福山定例能の番組を垂涎の思いで眺めております。

今年五月の職分会に、政允先生は「烏頭」を舞われました。この曲は長く拝見しておりませんでしたので、自分の為にも記させて頂くことにしました。

橋掛から小袖長袴の子方を先立て、静かにツレ(曲見・無紅唐織着流)が舞台に出てワキ座に。二人は後場の為予め出ているので、見所には見えない設定です。名乗笛でワキ着流僧が出ます。立山から陸奥の果てまで行脚する旨を告げ、二足程出るとそこは立山となります。能の場面転換の早さはテレビと同じです。僧はここ立山の、熱湯噴出火焰炎上の地獄そのま

まの有様を述べ、涙を止めかねつつ立ち去ろうとします。見所が其方に気を取られていると、いつの間にか幕の前に老人が現われています。小尉の面・紺着付に淡茶水衣の老人は、遙かに僧に呼びかけます。何か無気味な感じなのも道理、前シテは亡者なのです。僧が陸奥へ下るのを既に知っていて、外の浜で去年死んだ者、即ち自分の家族へ言伝てを頼みたいと少しずつ近寄ります。僧も橋掛まで行き怪しみながらも証擲がなくてはと云うと、老人はふと気付いた態で、着ていた衣の左袖をピリリと引裂き僧に差出します。能でそのような所作は他に無いので見所はハツとします。気を呑まれた僧は渡された片袖を懐に舞台の正先へ、老人は橋掛で僧を見送りシオつて中入となります。亡者は現実の世界である舞台には入れません。沈んだ地謡がその悲哀を現わしています。

能の手法で舞台は既に外の浜になっており、僧は里人に亡者の家を教えて貰い、一旦鏡板の前に坐ります。舞台は亡き獵師の家となります。子と共に下居していた妻は、静かに悲しみを語りシオります。謡の中に僧は立つて訪い、亡者よりの依頼を伝え、証擲の片袖を出します。夢かと疑った妻も傍(後見が出しておく)の衣を取り上げてその袖を重ね、形見を懐かしみつつ伝言を受けて蓑笠を手向けます。僧の唱える「頓證菩提」の経のうちに笛のヒシギ、肅然たる一声の囃子……。後シテは黒頭瘦男、紺着付に白水衣・羽装を着け杖をついて現れます。土の底からのような一声謡、見所にその凄みが漂います。シテは供養に対して有難く思いつつも尚、罪の消滅を願って僧を拝するので。地謡は辺りの荒涼たる様を語り、妻は子と共に戦きながらも亡夫に近寄る、それを見たシテは妻子への思いに溢れ、「千代童が髪を……」と子に近づくと子は退つて触れ得ず、シテは絶望してシオります。その有様を地謡は気を入れて語り、シテにも型があり、この辺りは観入り聴き入って見所も我を

忘れてしまいます。サシ・クセとなりシテは舞台の正面に下居、地謡の心に滲みる詞章・音節に魅せられている時、「報いをも忘れける」と下居のままハツと両手を打合せるシテで見所も我に帰るのです。上羽のあと、益々強く我が身を省み、親鳥を追う型が、能の中でも特殊なカケリとなります。杖で一つ打って右前へ、そして橋掛の一ノ松へ滑るように追ひ、又舞台に戻り、正面前に置かれた笠とその上をハツシと打った杖、その姿が脳裡に刻み込まれました。地謡の「親は空にて血の涙を」と聞き馴れた謡も胸が締めつけられ、型は矢継ぎ早に物凄くなつて行き、「羽抜鳥の報いか」の處、合膝(膝をつく型)を重ね肉体の苦しみを表現、舞台に出現した地獄に見所は身動きも出来ないうちに「助けてたべや御僧」と足拍子、両手は必死の思いを込め僧を拜んで曲は終わります。堂内は氷結、静まり返つた中を演者は音も無く幕へ去って行き、最後に囃子方が入る時、嘆息と共に拍手が起りました。

まことに素晴らしいお舞台でした。七百年前の作者の会心の笑みが見えるようです。現代の戦争の写真展には目を覆ってしまいますが、地獄の凄惨な品位ある美で具現する「能」の真骨頂が発揮されたお舞台でした。



能「烏頭」シテ大島政允 於 東京喜多能楽堂 (2008. 5. 25) 池上嘉治撮影

シテ 大島政允
ワキ 福王和幸
大鼓 柿原崇志
後見 友枝昭世
狩野秀鵬
地頭 塩津哲生
シテ連 大島輝久
アイ 深田博治
小鼓 鶴沢洋太郎
子方 内田貴成
笛 栗林裕輔

演能ご案内

2008年

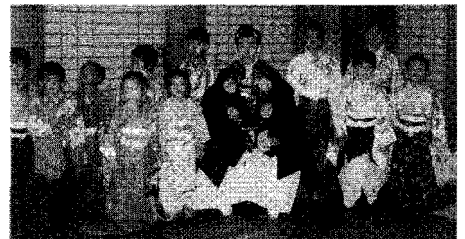
開催日	催し名	開演	会場	鑑賞料	演目
9月21日(日)	第214回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「半部」立石 大島政允 狂言「鳴子遣子」 茂山千五郎 能「白是界」 金子匡一
10月19日(日)	福山文化祭秋の会	10:00	喜多流大島能楽堂	無料	仕舞・素謡
11月3日(祝)	第38回 後楽能	12:30	岡山後楽園能舞台	前売券 5,000円 当日券 6,000円 学生券 2,000円	能「蟬丸」 内田安信 狂言「千鳥」 茂山千五郎 能「船弁慶」真ノ伝 大島政允
11月8日(土)	鞠の浦名舞台 紡ぎ出す時代	10:00 14:00	沼名前神社能舞台	無料	能学習発表 能楽への道しるべ 能舞「敦盛」
11月13日(木)	はじめての能楽大会	13:00	岡山後楽園能舞台	無料	能学習発表・鑑賞会
11月16日(日)	広島大島会	10:00	妙慶院	無料	仕舞・素謡
11月30日(日)	第215回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	お話 馬場あき子 能「卒都婆小町」 大島政允

2009年

開催日	催し名	開演	会場	鑑賞料	演目
1月3日(土)	新春能楽祭	12:00	沼名前神社能舞台	無料	奉納「翁」 大島政允
1月18日(日)	喜多流新年初謡会	10:00	喜多流大島能楽堂	無料	仕舞・素謡
2月8日(日)	第4回芸能大全 「幽玄の世界」	未定	リーデンローズ	無料	能「橋弁慶」 大島政允
4月19日(日)	第216回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「東北」 大島衣恵 能「小鍛冶」白頭 大島輝久
4月26日(日)	喜多流職分自主公演	12:00	東京喜多能楽堂	一般券 6,000円	能「小塩」 大島政允
6月7日(日)	喜多流春の会	10:00	喜多流大島能楽堂	無料	能・舞囃子・仕舞・素謡
6月21日(日)	第217回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「芦刈」 大島政允 能「飛鳥川」 松井彬
7月28日(火)	福山八幡宮新能	18:30	福山八幡宮	未定	未定
8月9日(日)	三和の森光信寺新能	18:30	光信寺	未定	未定
9月20日(日)	第218回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「放下僧」 長田 驍 能「三輪」 大島衣恵
9月26日(土)	喜多流青年能	12:30	東京喜多能楽堂	一般券 4,000円	能「班女」 大島輝久
11月15日(日)	第219回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「朝長」 大島政允 能「一角山人」 金子匡一

編集デスクより

- ・福山八幡宮新能は、大雨のため30分遅れでの開始でしたが、その後は奇跡のような、夢のようなお舞台でした。
- ・三和の森光信寺新能、11人の稚児達のかわいらしかったこと！暑い中、皆よくがんばりました。
- ・郷里のフィンランドに能舞台を建てるという大きな夢をもち、能楽療法をおこなっているスカイさんを8月末、はるばると訪ねました。ヘルシンキの美しい町並、湖としらかばの森に堪能した結婚35周年旅行でした。



喜多流大島能楽堂

〒720-0814 広島県福山市光南町2-2-2
TEL 084-923-2633
FAX 084-923-8730
<http://www.noh-oshima.com>

ホームページアドレスが変更になりました。

展覧会の案内

能・喜多流と福山

福山の能の歴史の概要パネル 能面・能装束・能画・能写真等
と き：2008年9月5日(金)～28日(日) 入館料：一般 290円
9：00～17：00 高校生までは無料
ところ：広島県立歴史博物館
福山市西町2-4-1
TEL 084-931-2513

「阿部正弘への10の質問」
の展示もあります。